

ベルリンにて

小田垣孝（九州大学教授）

六月末にベルリンを訪れる機会があった。ベルリン自由大学における仕事が終わったのち、ベルリンの壁崩壊後およそ十年が経った街の、かつての東西の接点あたりを歩いてみた。

マリエン教会

大学近くからのったUバーンを、別の線のUバーンに乗り換え、アレクサンダー広場で降りた。このあたりはかつての東ベルリンの繁華街であったようだが、今はそれほど人通りでもなかった。駅近くのデリカテッセンに入った。この店は、モスクワなどで見かけるような天井がやけに高いアパートの一階にあるもので、白い長い割烹着を着込んだ赤ら顔のおばさんが一人でやっている店である。東ベルリンの時代から同じように店をきりもりしているようであった。その頃のことを思い出しながら、ローストビーフのサンドウィッチとりんごジュースを買った。店の近くにあるマリエン教会の横のベンチに座って食べた。

マリエン教会は、森鷗外の小説「舞姫」の舞台になったところである。昔の面影そのままに静かにたたずむ青銅色の塔と煉瓦色の屋根が印象的であった。鷗外もこのあたりを徘徊したのであろうと想像しながら教会を巡った。ちょうど木立に囲まれた公園を女学生が通り、彼女が舞姫のように舞う幻想にしばらく時を忘れた。

歌姫

マリエン教会から、ウンターデルリンデンと呼ばれる菩提樹の並木道をブランデンブルグ門の方に歩いた。ドイツの学問の中心であったフンボルト大学の前を抜け、しばらく歩くと並木の間に巨大なブランデンブルグ門が見えてくる。ブランデンブルグ門は、ちょうどその下にベルリンの壁があったところで、東西の接点として何度もニュースなどで見ていたものであるが、実際に門の下に佇むと、何故ここに壁が存在しなければならなかったのか、何故一つの教義（ドグマ）がこれほどまでに人を不幸にしなければならなかったのかという果てしない疑問が込み上げてくる。

ブランデンブルグ門からSバーン、Uバーンを乗り継ぎ、さらにシュテットニッツ駅で別のUバーンに乗り換えるべく地下道を歩き出した。しばらく歩いていくと、通路の向う口から

inden stillen Hain her neider, Liebchen komm zu mir

…

という見事なソプラノの歌声が聞こえてきた。放送かしらと思いながら、薄暗い地下道を進んでいくと、どんとその声が大きくなり、少し曲がった角をまわると、その先のスポットライトを浴びたかのように明るくなったコーナーに二人のうら若き女性が立ち、その一人が歌っているのであった。他の一人の低く奏でるヴィオロンに合わせた澄み渡るソプラノで、それは見事な歌いぶりであった。張りのある声が地下道に響き渡り、歌声はこだまするわけでもなく、消えてしまうわけでもなく、耳に心地よく流れ込み、しばらく立ち尽くして歌声に聞き入った。鷗外の舞姫との出会いもこのようなものであつたらうかと想像しながら…。

チエックポイントチャーリー

チエックポイントチャーリーは、ベルリンの壁の間に開けられていた数少ない東西ベルリンの通路の一つである。今も、ゲートのあつた場所に大きな看板が掲げられ、その両側にはソ連の兵士とアメリカ兵の写真が貼られていた。壁のあつた道路には、Berliner Mauer（ベルリンの壁）1961 - 1989と書かれた板が埋め込まれていた。

実際の壁はすでになくなっているのであるが、両側の建物や人々を見ると、見えない壁がまだそこにあるように思えてならなかった。もとの東側の路上には、ウオッカ焼けをしたような顔立ちの数人の男性がそれぞれ路に小さな台を置き、壊されたベルリンの壁のコンクリート破片を売る姿があり、印象的であつた。

近くにあるベルリンの壁博物館には、三十年ほどの冷戦という戦争の中で、教義という目に見えない敵と戦つた無数の人々の記録が示されていた。

そもそも教義というものは、人間があつたものであるはずである。しかし、ベルリンの壁に隔てられた人々の悲劇と苦勞を思つ時、その人々は教義あつての人間としてしか見られていなかったと思わざるを得ない。教義の持つこの本末転倒した恐ろしい力の支配は、決して過去のものとは言えない。「我々のよって立つべき基盤が何であるかを常に問え」というのが Berliner Mauer から学ぶべき最も重要なことではなからうか。

（野村学芸財団会報 一九九九）

野村学芸財団（無断転載を禁ず）